

社会福祉法人 恩賜財團 済生会とは

済生会は、明治天皇が医療によって生活困窮者を救済しようと明治44(1911)年に設立しました。100年以上にわたる活動をふまえ、今、次の三つの目標を掲げ、日本最大の社会福祉法人として全職員約64,000人が40都道府県で医療・保健・福祉活動を展開しています。

- 生活困窮者を済(すく)う
- 医療で地域の生(いのち)を守る
- 医療と福祉、会を挙げて切れ目のないサービスを提供

病、老い、障害、境遇…悩むすべてのいのちの虹になりたい。済生会はそう願って、いのちに寄り添い続けます。

総裁:秋篠宮皇嗣殿下 理事長:炭谷 茂

なでしこ紋章の由来



初代総裁・伏見宮貞愛(ふしみのみやさだなる)親王殿下は、明治45年、済生会の事業の精神を、野に咲く撫子(なでしこ)に託して次のように歌にお詠みになりました。

露にふす 末野の小草 いかにぞと あさタかかる わがこころかな

野の果てで、露に打たれてしまれるナデシコのように、生活に困窮し、社会の片隅で病んで伏している人はいないだろうか、いつも気にかかってしかたがない

この歌にちなんで、いつの世にもその趣旨を忘れないようにと、撫子の花葉に露をあしらったものを、大正1年以来、済生会の紋章としています。

saiseikai.or.jp



斎藤和義さんの「おつかれさまの国」という歌に“そのひとの疲れに「お」をつけて「さままでつけて”という一節がありますが、関西ではなにかと「お」や「さん」を言葉にひっつけます。「おはようさん」「お芋さん」「お日さん」「仏さん」「天神さん」など、親しみのある語感はするっと馴染むような柔らかさがあり、関西弁の好きなどころです。関西に根付く「さん」付け言葉は「御所言葉」が由来とも言われています。御所言葉は別名「女房言葉」と言い、宮中や公家に仕えた女官が自分たちの食べるものと公家が食べるものを区別するために、公家の食べ物には語尾に「さん」をつけたり「お」をつけたりして呼び分けをしました。それが庶民にもひろがり、現代にまで残るほど定着したと考えられています。

大阪のおばちゃんがカバンに常備している「あめちゃん」は、京都や滋賀では「あめさん」と呼ぶこともあるそうですが、他人に勧める際におしつけがましくないように配慮して「さん」「ちゃん」をつけるようになったという説もあるとのこと。

大阪の松竹座の前で見知らぬおばちゃんが「あんた、これ食べ」とカバンから取り出し、私に手渡してくれたのは「おみかん」でした。とても甘くておいしかったです。(M)

SAISEIKAI KYOTO HOSPITAL

◎理念

思いやりの心・質の高い医療・明るい職場
～医療を通して地域に貢献～

◎基本方針

- 患者さん本位の良質で安全・適切な医療の提供
- 地域に応える連携・救急・災害医療・健診と地域包括ケアの推進
- 多職種によるチーム医療と協働の推進
- 人材育成・確保・勤務環境改善と働き方改革の推進
- 経営改善と新築移転事業の遂行



社会福祉法人
恩賜財團 済生会京都府病院

〒617-0814 京都府長岡京市今里南平尾8番地 電話 075-955-0111(代表) FAX 075-954-8255 <https://kyoto.saiseikai.or.jp/>

院外広報誌「京なでしこ」No.212 (2022年冬号) 発行者:院長 吉田憲正 発行:済生会京都府病院

No.212

Winter | February 2022

 SAISEIKAI
 KYOTO
 HOSPITAL
kyoto.saiseikai.or.jp



なでしこ



社会福祉法人
恩賜財團 済生会京都府病院

新病院にアートのチカラ

新病院の小児科病棟にアートのチカラを…。治療を頑張る子どもたち、その家族、医療従事者をアートでつなごうと、現在、嵯峨美術大学のみなさんと当院の産学連携によるホスピタルアートプロジェクトが進行中です。今回はこのプロジェクトにかけるそれぞれの思いをお届けします！



ホスピタルアートとは？ アートの力で医療環境をより快適な癒しの空間にする取り組みです。



小児科部長
勝見 良樹

体力や免疫力がまだ十分でない子どもたちは、時に入院が必要となります。病気の種類によっては数日～数か月の入院になり、子どもはもちろん、付き添いをする家族にとっても我慢を強いられる入院生活になるでしょう。このホスピタルアートには、入院する子どもや家族の気持ちが少しでも晴れやかになるように、入院生活が少しでも楽しいものになるように、そして勇気と希望を伝えられるようにという願いが込められています。



嵯峨美術大学 芸術学部
デザイン学科
グラフィックデザイン領域
池田 泰子 教授

病気というのは嬉しいものではありませんが、不幸なことばかりではないように思います。ここで過ごす子どもたちが穏やかに、楽しい気持ちで過ごすため、ほんの少しのお手伝いがアートにできるなら、これほど嬉しいことはありません。子どもたちと子どもを取り巻く医療や家族との間に、アートを通じてたくさんの明るい対話が生まれますよう、そこでの対話や想いがその子たちの力となりますよう、学生たちと明るい気持ちで取り組みます。

学生プロデューサー

鍋本 有沙さん(3年次生)

病院職員のみなさんと意見を交換し、入院や治療は子どもだけでなく子どもを囲む家族にとっても大きな出来事だと感じました。患者さんだけでなく医療に関わる全ての方々に楽しんでいただけるデザインにしたい、

また、これから10年、20年と長く使われるデザインとなるよう責任とやりがいを持って「飽きがこないデザイン」になるよう制作します。



学生プロデューサー

飯田 理沙さん(3年次生)

病院に訪れる子どもたちが痛い思いだけで帰るのでなく「あの病院ならまた来たい」と思える空間を作りたいと思います。ホスピタルアートは患者さんや職員のみなさん的心に安心を与える効果があると知りました。患者である子どもだけでなく家族や職員のみなさん、全ての方に安心していただける空間を作れるよう私たち一同、精一杯頑張ります。



学生プロデューサー 和田 真波さん(3年次生)

病院の通路などにデザインで鮮やかな色彩を施し、心地よい空間を作り出すことができる、この大きなプロジェクトに携わることができてとても嬉しく思います。

このプロジェクトを通して、ホスピタルアートは患者さんや職員のみなさんの心も明るいものにする効果があると知りました。病院に携わる全てのみなさんの気持ちを想い、頑張ります。



INFORMATION

新病院 NEWS 2022年6月1日開院！



済生会京都府病院は「京都済生会病院」と名称を新たに、阪急西山天王山駅近くに新築移転します。2022年6月1日に開院予定です。新築移転に伴う休診などの案内は、当院ホームページまたはLINE公式でお知らせしています。

LINE公式の
お友達登録はこちら



開院(開扉)時間を変更します

2022年4月1日より、正面玄関等入口の開扉時間を午前6:00から午前7:30に変更します。新病院(6/1開院)の開院(開扉)時間は7:30です。ご理解・ご協力のほど何卒よろしくお願い申しあげます。

開院時間変更 のおしらせ

2022年**4月1日**より
開院時間を
 →
6:00から**7:30**
に変更します

6月1日開院の新病院の開院時間は7:30です。
ご理解・ご協力のほど
何卒よろしくお願い申しあげます。

旬の食材と栄養

イワシには、骨粗しょう症を防ぐカルシウムとその吸収を助けるビタミンDの両方が含まれています。イワシには、骨粗しょう症を防ぐ「魔除け、厄除け」として枝の頭を戸口や門に挿しておく風習があります。また、EPAやDHAなどの脂肪酸がコレステロールや中性脂肪を減らす働きがあります。イワシに含まれるEPAやDHAなどの脂肪酸は酸化しやすいので、酸化を防ぐ効果のあるβカロテン、ビタミンC・Eなどの抗酸化ビタミンと一緒に摂取すると効果的です。その他にも、肝臓の働きをよくするタウリンを多く含む、貧血を予防する鉄、免疫を高める亜鉛、ナトリウムを排出してくれるカリウムなど様々な栄養が豊富です。脳の働きを良くしたり、老化防止にも役立ったり、生活習慣病の予防にもなります。



イワシ



当院では、医師や看護師、メディカルスタッフが
お互いの専門性を生かし、チームで患者さんやご家族の
支援に取り組んでいます。
このような取り組みを「チーム医療」といいます。
今回は、認知症ケア・せん妄対策チームをご紹介します。

認知症看護認定看護師 中曾根 朱美

2025年の認知症者数は700万人と推定され、65歳以上の5人に1人が認知症と診断されると予測されています。この数値は、これから認知症を特別なものとして捉えるのではなく身近なものとして「認知症とともに生きる」ということを表していると言えます。

当院では、認知症ケア・せん妄対策チームを結成し、入院患者さんを対象に2020年10月から活動を開始しました。認知症ケア・せん妄対策チームは、医師、看護師、社会福祉士、薬剤師、作業療法士、管理栄養士、事務とさまざまな職種で構成されています。それぞれの専門性を活かし、認知症の方を多方面から理解することで、その人らしい生活が送れるように支援をしています。

認知症の方や認知機能が低下した方々が、安全に安心して治療を受けられるようにチームで話し合いをしたり、各病棟を巡回したりしています。認知症の方と話をしながら、よりよいケアが提供できるように病棟看護師とも話し合いを重ねています。

認知症の方は何もわからない、何もできなくなると思われがちですが、苦手なことが増えただけで、具体的な説明を繰り返したり、見守りの時間を少し長くしたりすることで、できることはたくさんあります。苦手なことは補い、得意なことは

積極的にご自身に任せることが重要となります。このようにその人自身の「もてる力」に着目した支援を心がけて活動しています。

もの忘れと認知症のちがい

誰でも年齢とともに、忘れっぽくなったり、人の名前などを思い出せなくなったりします。こうした「もの忘れ」は脳の老化によるものです。しかし、認知症はちがいます。認知症は病気によって脳の神経細胞が壊れるために起こる症状や状態をいいます。つまり、認知症は加齢によるもの忘れとはちがうのです。

加齢によるもの忘れと認知症のもの忘れのちがい

	加齢によるもの忘れ	認知症のもの忘れ
記憶	体験したことの一部を忘れる (ヒントがあれば思い出す)	体験したことそのものを忘れる (ヒントがあっても思い出せない)
判断力	低下しない (ゆっくりであれば小銭で支払いができる)	低下する (支払いの計算ができず小銭が増える)
自覚	忘れっぽいことを自覚している	忘れたことの自覚がない
日常生活	支障はない	支障をきたす
実行機能	使い慣れた家電であれば操作できる	使い慣れた家電の操作ができない

認知症サポート医 齋藤 雅人(地域包括ケア病棟 顧問)

せん妄対策にも取り組んでいます

せん妄とは「意識レベルの低下により、見当識障害（時間や場所がわからなくなること）、幻覚、妄想、興奮、錯乱、活動性の低下といった症状をきたす精神機能の障害」といわれています。なんだか難しいですね。わかりやすく言うと、「寝ぼけて訳がわからなくなっている」状態に似ているかもしれません。とくに高齢

者は、入院すると環境の変化や手術のストレスなどで、せん妄を起こしやすくなります。その症状から認知症と間違われることがあります、せん妄は一時的な症状で多くの方は短期間で回復します。せん妄を起こすと本人にとって苦痛であるばかりでなく、もともとの病気の治療や看護に困難をもたらします。その結果、回復が遅れたり別の問題（例えば転倒・骨折）を起こしたりするので、予防することが大切です。

そこで当院では2021年4月より、入院してきた患者さん全員にせん妄が起きやすくなる要因の有無をあらかじめチェックして、せん妄予防対策をたてるシステムを立ち上げました。たとえば、ある特定の薬剤が原因でせん妄を起こすことがあります。この種の薬剤をできるだけ処方しない、あるいはより安全な薬剤に変更するなどの予防策をチーム主導で取り組んでいます。

管理栄養士 塚田 紗也

「口から食べる」を支える

認知症の方は、症状の進行に伴い、食事を食べる対象として認知できないことが起ります。そのような方には、食事への工夫が必要となります。例えば、食べ始めるための声かけや、箸を持たせて介助することで自己摂取ができるよう



9マスの弁当箱に料理を小分けにしています

支援をします。また、甘味の強い食品や味の濃い食品を好んで食べる偏食や食欲低下がみられることがあります。その場合は、食嗜好を確認しながら栄養補助食品の提供、プロテイン粉末やごはんにかける高エネルギーのソースを追加し、少量で栄養量が確保できるようにします。食事ペースが速い、一口量が多い場合は、窒息や誤嚥（食べ物が気管に入る）のリスクが高まるため、当院では少量ずつ盛り付けが可能な9マスの弁当箱を準備しています。料理を小分けにすることで、食事ペースや一口量の調整がしやすくなり、安全に食事が摂取できます。

このように一人ひとりに合わせた食事や介助方法を工夫することで「口から食べる」サポートをしています。

社会福祉士 島田 浩

認知症があっても安心して暮らせる地域づくりのために

「認知症状がひどくなり自宅で介護するのが不安です。退院後、どうしたらよいでしょうか？」「徘徊があり在宅介護は限界です。どこか入所できる施設はありませんか？」など、入院を機に認知機能が低下し、退院後の生活に不安を感じられる患者さんやご家族からの相談を多く受けます。私たち社会福祉士（医療ソーシャルワーカー）は、認知症であったとしても本人の意向や思いを最大限尊重し、ご家族への支援を行なながら生活の再構築をしていくお手伝いをしています。その方法として介護保険申請手続き、地域包括支援センターやケアマネジャーとの連絡調整、さらには転院や施設入所の相談を行っています。近年、認知症への関心や理解が深まってきたが、一方で認知症による周辺症状（徘徊や介護拒否等）を理由として施設の受け入れが難しいケースにも遭遇します。社会福祉士として院内チーム活動にとどまらず、地域で行われている認知症に対する施策との協業も視野に入れた活動を行いたいと考えています。認知症があっても安心して暮らせる地域づくりに少しでも寄与できればと思います。

こんにちは

地域包括ケア病棟 です。

「患者さん、家族の思いを大切に」をモットーに一般病棟での治療が落ち着いた後の治療の継続や退院にむけてのリハビリ、白内障手術や検査入院などを受け入れる病棟です。また、安心して退院していただくことを目標に、退院後の生活を見据えた支援にも取り組んでいます。



週に一回、看護師、社会福祉士、リハビリスタッフなど多職種が集まり、患者さんの退院に向けて情報を共有します。患者さんと家族の希望・意思を軸に目標を決め、その目標に向かってどうやってみんなで協力して関わっていくかを話し合いをしています。



患者さんは、慣れない入院環境で点滴やチューブ類を身に付けざるを得ない状況に戸惑ってしまいます。そのため、家族の写真を病室に飾ったり、使い慣れた物をベットサイドに置いて環境を工夫したり、一人一人にじっくり話しかけて、少しでも不安を緩和できるように取り組んでいます。



退院された患者さんに「退院後電話訪問」を行っています。退院後の生活がイメージとは違うこともあります。実際にどうであったか、困ったことはないかななど直接、患者さん・家族に聞いています。そこで得られた情報は、次の退院支援につなげ、患者さんの安心に役立てられるよう取り組んでいます。